連続講座「国民国家と多文化社会」第11シリーズ

北の島／南の島

島嶼社会と国民国家

第1回／6月1日（金）

報　　告：江戸　淳子（杏林大学外国語学部）

「ニューカレドニアのカナク・アイデンティティとその歴史」

コメンテーター：本名　　純（立命館大学国際関係学部）

第2回／6月15日（金）

報　　告：佐藤　幸男（富山大学教育学部）

「世界システムと太平洋島嶼国」

コメンテーター：柄木田康之（宇都宮大学国際学部）

第3回／6月22日（金）

報　　告：片岡千賀之（長崎大学水産学部）

「南洋の日本人漁業」

コメンテーター：中野　　泰（筑波大学歴史・人類学系）

第4回／6月29日（金）

報　　告：清水　久夫（世田谷区美術館学芸員）

「南洋／エクゾティズム／表象：土方久功をめぐって」

コメンテーター：仲間　裕子（立命館大学産業社会学部）

第5回／7月6日（金）

報　　告：齋藤　　一（帯広畜産大学畜産学部）

「中島敦，スティーブンスンを読み破る―『光と風と夢』のコンテクストについて」

コメンテーター：中村　和恵（明治大学法学部）

木村　一信（立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部）

第6回／7月7日（土）

コンサート：大島　保克（唄者・石垣島出身），サンデー（太鼓）

場所：立命館大学アカデメイア立命21　K 209会議室

（第6回は中野記念ホール）

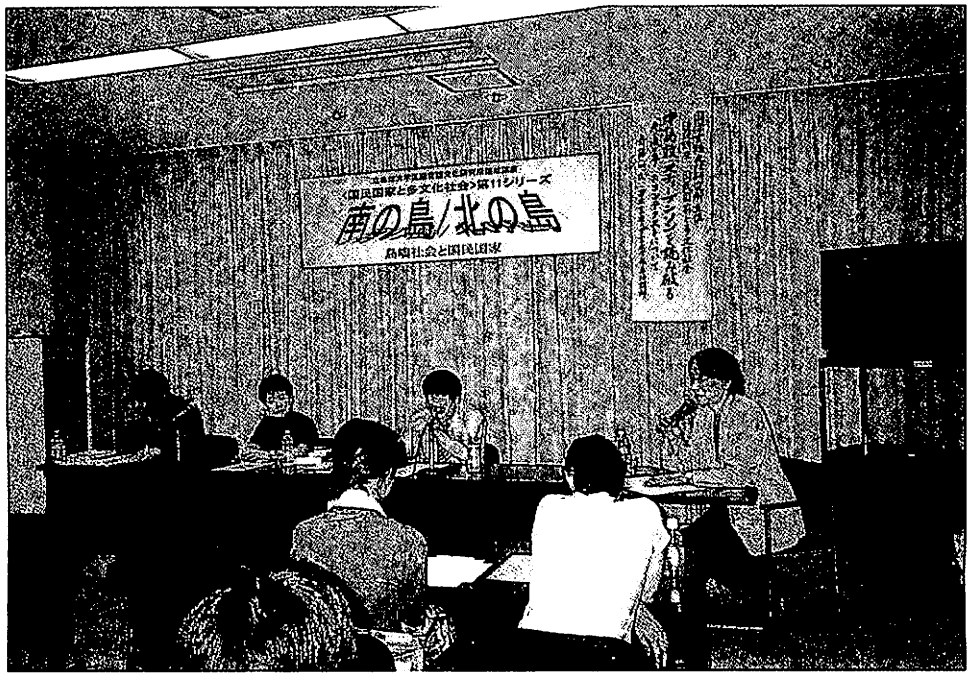
時間：16：30～19：30

北の島／南の島
島嶼社会と国民国家

立命館大学国際言語文化研究所では，1994年秋から「ヨーロッパ統合」「多元主義カナダ」「ポスト・アパルトヘイトの南アフリカ」「オーストラリアの鏡・日本の鏡」「アジアにおける国民統合とエスニシティ」「国民国家とアジアの現在」「国民国家と南アジア」「向こう岸（ラテン・アメリカ）からの問いかけ」「複数の沖縄」「文化接合の島：台湾」の表題で，連続講座＜国民国家と多文化社会＞を開催してきました。幸いにもその成果は人文書院から4冊の本として公刊され，広く知られております。

今回行われる第11シリーズでは，舞台を南の島々に移します。沖縄，台湾と海上の道をたどった私たちは，ポリネシア，メラネシア，ミクロネシアにやってきました。

15世紀，16世紀，新大陸を舞台に繰り広げられたスペインやポルトガルの野心は，ドン・キホーテの滑稽な戦いに終わります。シェクスピアが「あらし」をよんだ17世紀は西インド諸島が舞台です。そして野心の主はイギリスやオランダ，フランスに変わります。海賊たちの大活躍！

18世紀，彼らは南太平洋を駆けめぐる。エルドラドならぬ宝島を探し，南海の楽園を求めて，クックが，ブーゲンビルが，ラペルーズが訪れる島々。「お前の船をわしらの海辺から遠ざけて貰いたい！」（ディドロ）という島の老人の声。北の島の人々にとっての楽園への侵入は，南の島の人々にとっては地獄の季節でした。こうして，世界システムのどこかに拉致される島々。マイクロ・ステートという位置を与えられる島々。「我々はどこより来たのか？我々は何なのか？我々はどこへ行くのか？」という声はゴーギャンだけのものではなかったのです。

ニライカナイの遥か彼方，海上の道の向こうに，私たちは何を見たのでしょう？名も知らぬ島からの椰子の実の便りは何を物語っているのでしょう？豊かな資源にたくさんの漁船が網を運び，美しい自然にたくさんの観光客が足を運ぶ今日，島の老人の声は聞こえているのでしょうか？